

(2) 中世の交通路と堂地居館

前項では堂地遺跡の居館が越辺川沿いの自然堤防上でもかつての洪水常習地であって、川欠けのため荒廃地となった場所に立地していたことを明らかにした。しかし、河川沿いの低地は特殊な例ではなく、川島町内の小見野氏館や美尾谷氏館、それに比企氏館（金剛寺）も近似した立地を示すし、近隣では野本氏館や大串氏館、河越氏館も同様であろう。こうした立地は館の主が律令時代以来の公領以外の未墾地または荒廃地を主な対象とした開発領主であった故であろう。

ところで、これらの居館は中世の交通上どのような位置を占めていたのであろうか。古代武蔵国では官道である東山道は国府から北上していたため、埼玉県内では県西部の主に台地上を縦貫していた。しかし、9世紀後半以降、道路の管理は貫徹せず、部分的に利用されていたにすぎないようである。続く中世の官道として重要なものに鎌倉街道があり、上ツ道は鎌倉から県西部の丘陵地帯を北上していた。そのルートは東山道の西側数キロメートルの位置をほぼ併走していたとはいえ、丘陵地帯の起伏に富んだものであって、東山道とは全く性格を異にしていた。やはり軍事道路としての性格が色濃く、行政拠点である郡衙を結ぶことなく、街道沿いに竹之城遺跡(25)、大蔵館(7)、菅谷館(6)などの居館を構える鎌倉武士があったほか、堂山下遺跡のような宿駅と市をかねた交通集落も存在していた。この上ツ道には枝道も多く、所沢市内から分岐していた堀兼道は河越氏館と、その西側にほぼ併走する道は小代氏館(19)と結んでいたらしい。

それでは、川島町域に存在した諸館はどのような交通網を持って幹線とつながっていたのであろうか。この問いについては他の多くの地域よりも明瞭な回答が期待できよう。その理由は、低地においては自然堤防上に道路を設けるより方法がなく、条里に沿う畦道では用をなさなかったからである。

まず、堂地居館(1)は越辺川に沿う自然堤防上を通る旧国道254号線に接しているが、この道路は川越松山往還として中世末には既に整備されていて、岩付

太田氏の保護を得て伊草宿が六斎市で栄えていたことが知られている。しかし、この道路の起源はさらに遡る。少なくとも鎌倉時代初期には越辺川の堤防が完成していたので、安全な道として広く利用されていたはずである。北側は比企郡衙を経由して野本氏館(15)方面へ、南側は河越氏館(52)を経て堀兼道へと繋がっていた可能性が高かろう。河越氏館へ向かう場合、越辺川を渡渉する必要があるが、これは外界へでる場合の最低条件と見なしうであろう。いっぽう、川島郷内の交通網は現在も生きている古道によって結ばれていたことは疑いない。堂地居館から自然堤防づたいに東に延びる道は美尾谷氏館(79)へ至り、いったん北上してから西へ回り込み、前述の川越松山往還へ戻る環状の道をなしている。その起源の古さは沿道に多数の鎌倉期の板碑(オーフ)と鎌倉仏を本尊とする寺院(サ)が分布することによって証明されよう。

また、堂地居館から西方へは鎌倉街道上ツ道へ結ぶ東西結節路の存在が推定できる。越辺川の対岸の坂戸市から入間郡毛呂山町一帯は中世遺跡の稠密な地域である。しかし、まんべんなく分布する訳ではなく、交通路に沿っての分布が想定できたので、県立歴史資料館編の『埼玉の中世城館跡』と『埼玉の中世寺院跡』に掲載されている中世城館跡と中世寺院の内、とくに平安時代末から鎌倉時代とされるものを無作為に抽出し、所在地をプロットした結果、期待を超えるほど見事な直線分布が判明したのである。まず、越辺川を越えると、鎌倉時代とされる館は別所屋敷(42)、勝呂館(39)、栗生田氏館(37)、大河原氏館(34)、大類氏館(30)とほぼ2 km 間隔で一直線に並び、堂山下遺跡(29)付近で鎌倉街道上ツ道と繋がる。そして、さらには平安時代から鎌倉時代の創建とみられている東光寺(43)、宝珠寺(44)、大智寺(40)、広伝寺跡(36)大葉寺(31)がこの直線に沿うように分布する。これらのことからすれば、堂地居館はまさに東西と南北の主要交通路の辻に立地していたこととなる。